270～2 26年頃
[redacted]宗山地区委員会文化部 8月号 No2.

「氷壁」とナイロン・ザイル事件

中岩　武

まえがき

朝日新聞に連載された井上靖氏の「氷壁」は、映画化もされ、かなりの話題を呼んだ作品であった。穂高の氷壁の厳しい美しさは、氏の流麗な筆にのって、最近の登山ブームの一因を作ったとさえいわれているくらいである。しかし、その半面、この作品が生れる直接の動機になった所謂「ナイロン・ザイル事件」の方は、一部の人達の熱心な努力にもかゝわらず、不明瞭な疑惑を残したまゝ時の流れと共に忘れられようとしている。実際「氷壁」を読んだ人々の中でも、この小説のモデルとなった「ナイロンザイル事件」について知る人は少なく、まして、現実には小坂乙彦の家族や魚津恭太ら（何れも「氷壁」の登場人物）が、いうにいわれぬ不当な圧迫や悲憤の中に今もなお生活していることに思いをいたす人は殆どないといってよいのである。

かねがねこの事件に関心を持っていた私は、山岳雑誌「岩と雪」創刊号（三三年七月一日発行）で小坂の兄にあたられる石岡繁雄氏の真情あふれる訴えを読むにつけ、ますますこの事件がもはや登山界の問題ではなく、社会正義が守られるかどうかの問題になっているということを痛感せずにはいられなかったのであるが、ちょうど折も折、魚津や小坂の属していた山岳会「岩稜会」（三重県鈴鹿市、会員五十名）のA氏にお

逢いし、一層詳しいお話をきかせていたゞくことができたのを機に、一人でも多くの人々に事件の真相を知ってもらわねばと思いたって、こゝに拙い一文を呈する次第である。

(一) 切れたナイロン・ザイル

昭和三十年一月二日朝、石原国利（「氷壁」の魚津恭太）若山五朗（同じく小坂乙彦）、沢田栄介の三氏は、互にザイルに身を結びあって、舞い狂う吹雪の中を、前穂高の東壁へ最后のアタックを試みていた。頂上直下三十米、頭上の岩壁にナイロン・ザイルをかけたトップの若山氏が三メートルばかりよじ登った時だった。氏の左足がスリップし、五十センチばかりずるずるとずり落ちた瞬間、生命の綱であるナイロン・ザイルが殆どショックなしにプツリと切れ若山氏の身体はアッという間に二百米の谷底に墜落してしまったのである。

一ケ月の凍傷を負って救助されたリーダーの石原国利氏は、直ちに「原因は岩角にかけたナイロン・ザイルが若山君の五十センチのずり落ちで切れたためだ」と発表した。これが「ナイロン・ザイル事件」の発端である。

わずか五十センチのずり落ちでナイロン・ザイルが切れる――――これは当時の登山界では到底信じられぬ「世にも不思議な物語」であった。なぜならナイロン・ザイルは、絶対に切れない生命綱というキャッチ・フレーズで売り出されたばかりであり、従来の麻ザイルよりもはるかに強力であると誰もが信じていたからである。

即ち、

第一に張力に対して圧倒的に強いこと。

第二に金属のギザギザの縁でこすりつける実験でも麻の三倍も強いこと。（東洋レーヨンの宣伝用パンフレット）

第三にその上軽くて操作に便利なこと。

以上の三点からいっても、ザイルは遠からずナイロン一色になるだろうとは、登山界の常識になりつゝあり、山岳雑誌でもそういう主張が多くの人によって発表されていたのである。

だからこそ遭難した若山氏たちは「苦しい財政下で

待望のナイロン・ザイルを入手して嬉々として喜び、輝かしい登攀の日を夢にえがきながら、床の間にあげて大切にしていたのである。」（「岩と雪」創刊号）

㈡　切れたか、切ったか

然るにナイロン・ザイルは切れたという。しかも何のショツクもなしに。ナイロン・ザイルの強さに何の疑いももたなかった当時の登山界が、石原国利氏の発表に疑惑の眼を向けたのも、けだし当然のことだったといえよう。即ちその疑惑は、

一、そのザイルは古かったのではないか

二、ピツケルとかアイゼンとかで、事前に傷がつけられていたのではないか

三、切れたのではなく、ザイルがほどけたのではないか

四、さもなくば人為的に切ったのか（「氷壁」の八代美那子は、小坂乙彦が自殺したと想像する）

というふうに、いろいろの角度から、又いろいろの方面の人達によって、一斉射撃のはげしさで石原氏に浴びせかけられたのである。（今日では、こんな疑問を持つ人は誰もいないが）

それは、しかし大部分が、メーカーという（それも東洋レーヨンというような日本一流の）一つの巨大な近代的機構の保証があるのだという絶対の安全感の上にまたがった、至極安易な立場からのものであった。けれどそれだけにまた、一人の無名の若き登山家の必死の抗弁などは、まるで鼻にもかけない、いわばかさにかゝった発言であった。早大の某助教授に至っては、雑誌「化学」誌上に「ナイロン・ザイルはそんなに弱いはずはない。誰もみていないのを幸に、実際には自分達がザイルを傷つけていたのをかくして、罪をザイルに転稼させたのであろう。」とさえ広言してはばからなかったのである。

このように、大学助教授という一つの権威が、一流メーカーというそれにも増す権威を友連れにした発言――それらを含む一切のものが石原氏やその主張を擁護する「岩稜会」の前に大きく立ちふさがったのである。

石原氏らは、先づこの「ナイロン・ザイルは絶対切れない」という鉄の壁のような信仰に挑まねばならな

かった。しかもそれは、単に真実を訴えるということにとどまらず、自らの潔白を証明し、ザイル・メーカーという巨大な怪物から身を守るためにも、いやが応でも受けてたゝねばならぬところへ追いこまれた、絶対絶命とでもいえる性質のものであった。なぜなら、事件直後の石原氏の発表によって、売れ行きが落ちたというザイル・メーカー東京製綱（「氷壁」では佐倉製綱の名で登場）から、信用毀損罪（刑法第二百二十三条）で訴えられる危険性は日増しにつのっていたのである。

石原氏と死んだ若山五郎氏の長兄石岡繁雄氏を中心にした「岩稜会」は直ちに現場で使ったナイロン・ザイルの残りで実験にとりかゝった。それは以上のような意味からも、又広くは一般登山者の生命の危険という関点からも直ちにとりかゝらねばならなかった。事実、この事件とほゞ時を同じくして（昭和二十九年十二月二十九日）明神岳東壁でも東京「東雲山岳会」員によるナイロン・ザイル切断事件が発生していたのである。（最近では三十三年三月神戸大学山岳部員二名が滝谷のクラック尾根をアタック中、ナイロン・ザイルが切れ、死亡した事件があった。）

石原氏たちは事故のおきたザイルの残りをこまごまに切ってテストをくりかえした。最愛の友、かけがえのない弟を失った悲しみとあらぬ疑惑に射すくめられた苦しさと、二重の重荷に押しひしがれながらくりかえされた実験は、正にシジフオスの苦しさそのものであったろう。その時の有様を石岡繁雄氏は次のように述懐している。

「そのザイルこそは、二ケ月前には生命の綱として、床の間にあげて、大切にしていたのである。それが今ぶつぶつに切断されることになると誰が想像したであろう。ナイロンの原糸がよれよれになって、風に吹かれて庭にとびかい、又溶解して足もとにへばりつく。それらの光景を私達は、はりさけるような、どこえももってゆきどころのない気持で眺め、たゞ黙々と自分達のおかれた運命のきびしさ、悲しさをかみしめていたのである。（「岩と雪」創刊号）

結果は、石原氏へのいまわしい疑惑を一掃するものだった。六六、五度の稜角をもつ鉄の三角柱を支点にした実験で、なんと七〇キロ～九〇キロの重さでナイ

ロン・ザイルはあっけなく切れてしまったのである。（メーカーのデーターでは一、〇三〇キロに堪えるとされていた）

石原氏たちはこゝに至って自らの正しさへの確信を更に新たにした。

後はたゞ事件に対して客観的な立場を有する機関又は人による、厳密な科学的調査を待つばかりとなったのである。

では一方ザイルメーカー東京製綱とそれの親会社ともいうべき東洋レーヨンの立場はどうであったか？

「五十センチのずり落ちで切れた。」という石原氏の発表でザイルメーカーはたしかに大打撃を受けた。事実、東京製綱と東洋レーヨンは事件直后の三十年三月二十四日「原因がわかるまで一時使用を中止されたい。」旨を登山界に申し入れ、ナイロン・ザイルの回収さえ行わざるを得なくなったし、その影響は漁業用ロープにも及び、二十九年にはナイロンの全消費量の四〇・九％であったのが、この事件のあった三十年上半期には二九％と激減してしまったのである。

もとより、メーカーは事件発生后も一関して「事故の原因はザイルの欠陥ではなく、使用者の操作の誤まり」だと主張してきた。だがそれは「切れるはずはない」という一般の意見の上に乗ってはいたものの、事が意外に大きな波紋を社会に投げかけた今日、もう、遺族を相手に「使い方を間違ったから墜落したのだ」と水掛論をくり返しているだけでは事は済まされなくなってきた。

この事件で受けた大きな打撃から回復するためには是が非でも「我が社の製品に限って不良品は絶対になく、ナイロン・ザイルはこの通り実に強力である」という証明を天下に公表し、石原氏の発表を完膚なきまでに粉砕することが焦眉の急となったのである。

かくて、石原国利氏の側からもメーカーの側からも完全に公平な立場にある然るべき権威者に、この難事件の究明をゆだねることが不可欠の要件となった。

㈢　公開実験＝篠田教授の登場

このようにして登場したのが、登山用具の権威者であり、日本山岳会関西支部長、大阪大学工学部教授である篠田軍治氏（「氷壁」の八代教之助）であった。

けだし氏の登場は衆望のみるところ、この難事件の解明には最もふさわしい人物とみられたのである。

公開実験は、昭和三十年四月二十九日、篠田教授の指導下に東京製綱の蒲郡工場（愛知県）で、多数の登山家、新聞記者の立会で行われた。

ところが、結果は翌日の中部日本新聞に六段抜きで報道されたように、八ミリのナイロンは十二ミリの麻よりも強く、前穂高の東壁と同じ条件で、ナイロン・ザイルは切れなかったのである。

この実験は、九十度と四十五度の角度をもつ花崗岩のエッヂを使い、五十五キロ（ほゞ人体と同じ重さ）のおもりをつけたザイルを上から落としてザイルの強度をためすという方法をとった。しかも、その上、切断時と同一条件より落下距離を数倍高くし、又、ザイルをそのエッヂに横にこすりつける実験も同時に行ったが、いづれの場合もナイロン・ザイル八ミリは実に強力だったのである。

こゝに、九十度の角度をもつ岩角で、五十センチのずり落ちによって八ミリのナイロン・ザイルが切れるか否かという実験は、ザイルメーカーの完全な勝利によって終りを告げたのである。現場条件を再現して実験したが、ナイロン・ザイルは切れなかった――即ちそれは、石原国利氏の発表は信じ難いという結論を冷然とつきつけたのである。

かくて、ザイルメーカー東京製綱の信用は一挙に回復した。そして同時に、石原氏と「岩稜会」の立場は悲惨なものとなった。それでなくてさえ疑いの眼を向けられていたのであるから、公開実験后の石原氏がどんな苦境に立たされたかは想像するに難くない。若山五朗氏の厳父は「これで石原がやったか五朗が失敗したかのどちらかになった。しかしいずれにしても石原に一ぱい食わされた。村の人々にもあわす顔がない」と、石原氏を殺人罪で告訴するといゝだし、若山氏が山に魅かれるようになる遠因を作った長兄の石岡繁雄氏にも勘当をいゝ渡されたそうである。（厳父は悲憤のうちに一昨年亡くなられた。）

この辺の事情は井上靖氏の「氷壁」でも「魚津は小坂の葬式に参列できなかった」という風に書かれてあるが、とも角、この実験結果によって登山界の態度も又、決定したのである。

四　隠された実験のカラクリ

さて、この公開実験が、本当に現場条件の再現のもとにやられたのなら、これですべては解決したはずであった。たとえ、石原氏が苦境に追いやられたとしても、それは厳密に科学的な実験データーの結果なのであって何等文句のつけよう筈はないし、一方、東京製綱と東洋レーヨンにとってみれば、それは万々才の結論以外のなにものでもなかったのだから。

ところが、篠田教授の指導になるこの公開実験には現場条件とはちがう、たった一つの盲点がかくされていたのである。しかも、そのたった一つが、実験の結果を全く逆にする程のものであろうとは、立会った多くの人々の誰もが夢想だにしえなかったところであった。（中部日本新聞社の記者もその一人だったのだ）

それは、ザイルを落とすとき支点になった、九十度と四十五度の花崗岩の岩角が、まるく磨かれていたという事実である。アルプスの岩場には丸い岩角なんかあるものではない。岩角はほとんどすべてヤスリのように鋭い角をもっている。無論、遭難現場の前穂高の岩壁もそうであった。（切断したザイルをかけた岩角の石膏による復元模型を一見すれば明瞭である。）

公開実験に立会ったザイルメーカーの工場長は、その場で「事故のおきたザイルは、この通り前穂高と同じ条件でも切れません」と言明しているではないか。なぜ同じ条件でないようにわざわざ岩角を丸くしたのか？

これに対して、この岩角をつくった石屋は「運搬中にかけるといけないから丸くした」といゝ、東京製綱の関係者は「角を丸くしておかないと落下衝撃テストの場合、摩擦熱のため岩角が早く摩滅し、テストをつづけることが出来ないので岩の角を丸くした」といっている。そして当の篠田教授は「ナイロン・ザイルが鋭い岩角で欠点をもつことは自明だから、公開実験では岩角が丸いときに強いかどうかの実験を行った」と言明している。

これをみると三人三様それぞれ理屈をつけているがとに角、岩角を丸くしたことだけは一致して認めているのである。

こゝで前二者の勝手な言分はさておくとしょう。聞き捨てられないのは篠田教授の言葉である。（これは

后、氏が石原国利氏から告訴され、検察当局に供述した時の調書に記されている。）

鋭い岩角で欠点をもつことは自明だ……と教授はいう。では、このことを教授は以前から知っていたのか。その通り。誰よりも篠田教授はナイロン・ザイルが岩角に弱いことを知っていたのだ。

それには次のような事実があったのである。即ち、事件発生後二ケ月余りたった昭和三十年三月、東京製綱に原料を卸している東洋レーヨンが、篠田教授にナイロン・ザイルの強度試験を依頼し、同教授は三角ヤスリを用いて麻とナイロンをそれぞれテストしているのである。それは、一端を固定し、一端に十キロのおもりをつけたザイルを三角ヤスリの上に張り、ヤスリの五センチの往復運動によって強度を調べる実験であったが、その結果は、

十二ミリの麻ザイル……二百四十回～三百三十回で切断

十一ミリのナイロン……三十回～三十四回で切断

八ミリのナイロン……十二回～十四回で切断

となり、問題の八ミリナイロン・ザイルはヤスリの上では麻の二十分の一の強さしかなかったのである。

だから篠田教授は自身の実験によって、蒲郡の公開実験の一ケ月前に、既にナイロン・ザイルの欠点を熟知していたわけである。つまり石原国利氏の事件直後の発表は正しいと知っていたのである。言いかえれば岩角を丸くしなければザイルは切れると知っていたのである。

なぜ、篠田教授はわざわざザイルが切れないような方法を選んだのか。

もちろんこれは、うかつにかんぐることのできない問題であり、篠田氏の良心に問うより外は正確な答は期し難いだろう。私は唯、教授の微妙な立場を雄弁に物語っている次の言葉を指適しておきたい。

それは、公開実験を五日後に控えた三十年四月二十四日、東京製綱との仲裁の労を依頼しに来阪した石岡繁雄氏への教授の答えである。

「東京製綱はこの事件のために販売力が落ち、逆に被害者側をうらんでいる、私としてはかゝるうらみ方は決して正しいことではないと考えている。しかしメーカーを気の毒とは思っている。ザイル切断の事は非常

に大きな出来事で、是非共その原因を究明しなくてはならない。自分も努力をつゞけているが、資金の関係で困難であり、たまたま、メーカーから研究依頼があったので、その資金によって研究している。遺族とメーカーとの見解が対立しているときに、一方の側の援助で研究するということは本意ではないが、それだからといって結果を誤るということは絶対にない」

ザイルメーカーから資金を受けたことを言明しているのは教授の良心といえるのか、それとも、拭いえぬうしろめたさに対する教授のいつわらぬ告白なのであろうか。

(四) メーカーと大学教授と検察庁と

篠田教授の見事な公開実験で、ザイルメーカー東京製綱の名誉は一挙に回復された。実験に立会った者も中部日本新聞の報道に接した者も、ひとしくナイロン・ザイルの強さを再認識したのだから。教授がどう弁明されようと、この実験でナイロン・ザイルは強いという結論を社会のすみずみに行きわたらせ、東洋レーヨンと東京製綱に大きな利益をあたえたことは否定できないし、又、石原氏はじめ遺族の方々を窮地に追いやったことも疑問の余地がないのである。

しかも、「鋭い岩角で切れるかどうか。(即ち、前穂高の岩壁で切れたかどうか)」という一点にのみ社会の関心が集中している時に、その問題に答えるための実験を引き受けながら、故意にアルプスではありえない丸い岩角を使用してメーカーを有利に導いたことも、否定できぬ客観的事実である。

「岩稜会」が、再度にわたる内容証明の書簡を同教授に提出して面談を求め、話し合いによる円満解決の機会を作るべく努力した后、石原国利氏の名において教授を「名誉毀損」で告訴したのも、まことに当を得た行為といわねばならない。(三十一年六月二十二日)

私はこゝで、篠田教授が「岩稜会」の再三の申入れを「公務多忙」を理由に拒否し、朝日新聞信夫専務の仲裁申入れをも言下に拒否した態度についてはとやかく言うつもりはない。大学教授ともあろうものが、貧しい地方の一山岳会ごときに会う時間などないと言われたとしてもそれは尤もな話だからである。

だが、検察庁の供述調書に述べられている教授の「

ナイロン・ザイルが鋭い岩角で弱いことはわかり切っている。私はたゞ、岩角が丸い場合の実験をやっただけだ。私は新聞記者がみていたとは知らなかったのだ」という主張――つまり、中部日本新聞の記者が勝手に鋭角に強いと誤報したのだから、自分の知ったことではないといわぬばかりの言い分は、永久に消えぬ汚点として教授の良心に残るであろう。事実、公開実験前に岩角が丸いということは誰にも知らされていず、それに丸い岩角を対象にした実験などに多数の登山家や新聞社が押しかけることなど考えられもしないし、およそ意味のないことである。（くりかえして言うが、前穂高の条件で切れたか否か、石原発表は正しいか否かにスポットがあてられていたのだ）又、記者がいたのは知らなかったなどは当の記者も真向うから否定しており、常識でも到底納得できることではない。

だが検察庁（大阪地検倉藤正雄検事係り）は、告訴人に対してたった一度の事情聴取もせずに、昭和三十一年七月二十三日、不起訴処分にした旨を発表したのである。しかもその不起訴理由たるや「篠田教授の行為は良心的で、公開実験前にナイロンの欠点を知っていたとしても、その事実摘示をすることが、はたして公益上必要であったかどうかが問題の核心である」という、木で鼻をくゝったようなものだったのである。

まさに検察庁らしい事件のサバキ方であった。菅生事件をみても松川事件をみても、サギをカラスと言いくるめることを仕事の一つとしている検察庁とはいえ、今度もまた、彼等は真実の側にはたたなかったのである。

検察庁が「良心的」と断定した篠田教授の行為とは、つまり次のような事実なのだ。

一、教授は、岩角に弱いナイロン・ザイルの欠陥を百も承知の上で、しかもそれを一切口にしないで公開実験に望んだ。

二、公開実験では、岩角で切れるかどうかをみるために集った人達を前に、角を丸くみがいた岩角で実験をやり、その事実には一言もふれなかった。

三、後日、角を丸くしたという事実を追及されるや「自分はナイロン・ザイルの強い場合の実験だけをやったのだ。岩角で弱いことは今更やらなくてもわかっているのだ」と開き直った。

実に、メーカーと大学教授と検察庁という得体の知れぬ三重奏団のかなでる奇妙な協奏曲ではあった。

メーカーは大学教授という一つの権威を巧みに利用して、ナイロン・ザイルが強いとのみせかけに成功し、検察庁は教授のその行動に「良心的」のレッテルを貼ってやった。――これが三重奏曲の内容なのである。

(六) 問題は残されている

不起訴処分によって、もはや法的に残された道は殆ど途絶された。民事訴訟による方法が残されているというが、大勢に影響を与え得ようとは思われない。

だが法的にはどうあれ、ナイロン・ザイルが尖った岩角には弱いことは既に天下周知の事実であり、それゆえにこそザイルメーカーはナイロン・ザイルの製造を中止せざるを得なくなっているのである。

私はあまりにも篠田教授にのみ攻撃を集中したかも知れない。もちろん、スポーツマンであり、大学のスキー部長であり、学生間に大変信望があついといわれる教授にすべての責任があるなどと私は考えているものではない。むしろ、厳密な意味では、教授をしてこのような立場をとらざるをえないように追いやった（と私は信ずる）背後の力こそ第一に糾弾されねばならないだろう。

それを裏書するように、告訴後、石岡繁雄氏に対して「メーカーはこの事件をどんな手段を用いてでもウヤムヤにしようとしている。既に億の金を使っているだから君達がどんなにがんばってもだめだ。今のうちに告訴を取り下げた方がよい」と強く要求した某博士があったそうである。

このような有形無形の圧力によって告訴人側もかなりの動揺を余儀なくされたことも又事実である。石原氏に対して大いに同情的であった作家井上靖氏も、不起訴は決定的であるとして、その場合は甚だまずいことになると告訴の取下げについて相談をかけられたりしたそうである。又「氷壁」の朝日新聞への連載についても、メーカーから名誉毀損で訴えられる危険を避けるため事前に朝日新聞へかなり事件の本質をぼかしたアラスジを提出してから、その承認のもとに掲載したという話もきいている。（「氷壁」の八代教之助は、多少偏屈だが、学者気質の立派な人物に描かれている）

たしかに、告訴中には、第三者の仲裁で示談による円満解決という線があらわれては消え、消えてはあらわれた。だが少くとも私は、これらの意図がすべて水泡に帰した今日の状態を、所謂事態が円満（？）に解決したよりも、真実と正義のためには望ましいこととして受けとっている。

なぜなら、この事件は登山界だけの問題ではなく、ましてや一大学教授だけの問題ではないからである。

この奇怪な三重奏曲の真の主役は、自らのもつありとあらゆる物量を動員して事件のモミ消しを計ったザイル・メーカーであることは誰の目にもあきらかだと思う。「切れないというザイルが切れた。切れることがわかっているのに切れない方法で切れるザイルの実験をした。そしてせめて私の身の潔白を示すための告訴も不起訴になった――私は、その背後にある大きな力をいまも憎んでいます。死んだ若山君のためにも……」（三三年一月二日、名古屋タイムズ）

と叫ぶ石原国利氏の言葉を私たちは無為にしてよいだろうか。

自らの利益のためには、一人の登山家の人権などはチリ芥のように見捨て、劣悪な商品にも保証付のレッテルを貼り、そのために多くの登山家に遭難の危険がふりかゝろうが意にも介せず、そして文明社会の最高のブレーンである大学教授をすら一個の操り人形に化せしめた資本主義の冷酷な本質を、この事件はまざまざと見せつけてくれた。「身体中のありとあらゆる毛穴から血を汚物をふき出しながら歴史の舞台へ登場した」資本主義は、穂高の氷壁をも、アルプスの白雪をも容赦なく汚汁で染めてみせたのである。

我が国の著名な弁護士正木ひろし氏は「岩稜会」に「検察庁に正義を求めることは、木によって魚を求めるが如く、私は絶望しています」という書簡を送られたそうだ。もちろん氏のこの言葉を否定するものではないが、だからといってこの事件の追究を少しでもゆるめるべきではあるまい。真実と虚偽、正義と不正義の間にはいささかの妥協もありえないからである。

このような意味から本年四月三日付中部日本紙が、かっての誤報を訂正し、「岩稜会」の立場を支持する内容の記事を掲載されたことは心強い限りである。私たちはこれを機に、この事件のかくされた本質を追究し、「岩稜会」の人達が三年半にわたって守りつゞけてきた真実の灯を、一層燃えたたせねばならぬ。それが、ひとりアルピニストのみならず、真理を愛するすべての人々の一致したつとめであると私は信じている

（激励先）　三重県鈴鹿市神戸新町

伊藤経男方　岩稜会